

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 124 号

平成24年8月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助「ローマ人への手紙 講解説教」より（3）

第5講 パウロの自己紹介（4）

信仰の従順

パウロは、（ロマ書第1章5節で、）「ユダヤ人以外の異邦人すべてを信仰の従順に至らしめるために」と言っている。...

「信仰の従順」の「の」という字は、大変に難しい字です。例えば、「英語の」勉強と言え、**「英語を」**勉強することであり、この「の」は目的格を表します。また「私の」本と言え、**「私が所有する」**本という意味ですから、主格を意味します。従って、所有格の「の」は、主格にも目的格にもなるのです。私は、この「信仰の従順」の「の」を目的格に訳したい。目的とみなすと、従順という字は他動詞では無いので、「信仰というものに従順」という意味になります。信仰とは、「あることを真とすること」であります。そして、この信仰とは、我々の持つ自分の知恵、自分の経験を超えた、自分以上のものを獲得するための、唯一の方法であります。

ここでパウロの言う「信仰」とは、福音の信仰であり、「福音を本当と信じる」ことです。福音の内容は、イエス・キリストの十字架の贖いであり、この信仰に従順に従い、真とすることが大切で

あります。福音を真とするけれども、それに従わない人がおります。例は悪いが、例えば、「冷水摩擦は健康によい」と一般の人は信じているが、これを実行しない人もいます。福音、すなわち、いかなる人にも永遠の生命を与えて下さったということ信じ、またこれに従う人は、この世のことを恐れぬ。この世の失敗を恐れぬ。信仰に従順にならないと、贖いの信仰は成就されません。

(P.43)

目の前に置かれた義務

贖いの恵み、パウロは、それ以外の恵みを恵みとは言わない。... 十字架の恵みのことでもあります。神が我々の罪咎を贖い、我々のすべてを贖い、すべてを帳消しにして、我々に永遠不滅の生命を与えて下さった、これを「恵み」という。これ以外を恵みとは言わない。

恵みはすべての人に向けられておりますが、パウロには特別に使徒という職が与えられました。使徒というのは、福音宣伝の勤めを持つ者です。牧師の務めもこの使徒の務めと同じです。私は、この高円寺東教会で福音を述べて、自分の勤めを果たしつつあります。パウロには使徒たる務めがあり、この務めを行うことが神の意思を行うことです。この神の意志を行なうこと、すなわち自分の努めを行なうことを、「愛」という。運転手は運転をすればよい。これが神の意思、愛を行なうことであり、これが人類に奉仕する最も尊い務めです。妻は妻として、会社員は会社員として、学生は学生として、果たすべき務めがあります。神がそれをやれと言っておられる。これは難しいことではありません。目の前に置かれた義務です。これを遠くに求める必要はありません。キリスト教でいう「愛」は、目の前にある。「汝の手にあり、口にあり」とパウロは言いました。本当に深い愛は、目の前にあります。遠くに出て行く必要はありません。キリスト教でいう「愛」は、目の前にある。遠くに出て行く必要はありません。諸君は、自分の目の前に置かれた日々の務めをおろそかにしてはならない。私が今こうして福音を宣伝できるのも、過去 20 年の間、嫌いな務めをしてきたおかげです。私は会社員であった頃、好きでない仕事を辛抱してやって来ました。イエスは、30 歳までは大工の仕事をやっておられた。どんなに苦しくとも、与えられた自分の仕事を怠けてはいけません。辛抱してやりたまえ。きっと道が開けてきます。私も 50 歳になって、俄然として道が開けてきました。伝道師の方が長くなった。もう 25 年目になりますから。私には私の務めがあります。みなさんにもみなさんの恵みと努めがあります。

(P.45)

信仰の従順・恵み

本日のレッスンを顧みますと、最も重要なことは、「信仰の従順」という言葉です。信仰とは何か。イエス・キリストの贖いを真とすることです。真とすることにより、神の子とせられ、永遠の命を頂くことを、従順に受ける。この従順によって信仰が生きてきます。この信仰に従うことを、これから 16 章にわたって学びます。

第 2 の重要なことは「恵み」です。これは十字架の贖いであり、パウロはこれ以外を恵みとは言いません。これを説くことを福音の伝道という。この壇上ではこのことを述べます。善行して下さい、立派な人になって下さい、とは言いません。宜しいですか、私は、このことを死ぬまで述べます。

私は、ロマ書の勉強を生涯の仕事としたい！私は他の大先生の説教や本を読みたくありません。読む力もない。私はロマ書を読む。これ以上の書物があるはずがない。パウロ自身が書いたものですから。私は時間があればロマ書を読む。ですから、諸君、私を遊びやレクリエーションなどに誘わないでほしい。私にとっては、ロマ書を読むことが何よりのレクリエーションですから。...

ロマ書は、神に愛されている信徒にあてた手紙、求道者にあてた手紙です。ですから、聖書は、未信者の大部分の人には興味がない。しかし不思議なことに、二千年もの間、厳然として続いています。諸君にも、聖書の意義とその深さを理解する日が、きっと来ると信じます。

(P.47)

霊の賜物は、信じるだけ

我々は、この世の賜物、肉の賜物がほしい、これらは我々によく分かるから。過日、皆様のおかげで、私に年金がおりました。厚生年金の老齢年金です。教会の皆様から頂いた保健のお陰です。私は今までこんな大金を頂いたことはなかった。これは、この世の賜物ですから分かり易い。しかし、霊の賜物は分かりにくい。信仰によって、自分で会得するほか方法がない。...我々は、霊の賜物を知ることも、また、感ずることもできません。信じるだけです。信じた時に、それが自然と、いつとはなしに、すなわち、自分の生活にそれを当てはめているうちに、信仰的にそれが自分のものとなって来る。ここが難しいのであります。

私は、本当に高いものとは、そういうものだと思います。音楽にしても、芸術にしても、本当に高いものは一遍で分かるものではない。自然に、それに接していると、そして、自分の生活にあてはめているうちに、だんだん分かって来る。これは、福音の真理が高いという証拠です。どうしても、最低10年はかかると思います。私は、福音を外国語とみていますが、3年や5年で分かるものではありません。少なくとも10年間、自分の生活にあてはめてやっと分かる。ああ分かったと、じきに有頂天になったらだめです。道元禅師は、「朝露の中を歩いていると、いつ濡れるとは分からないが、自然としっかりと濡れてくる」と言われましたが、福音の理解もかくの如しです。

パウロは、こうした霊の賜物を幾分でも分け与えたい、それがあなた方を力づけると言っています。この「力づける」という言語は「確立させる」、英語で言うならば「strengthen」、あるいは「establish」に当たります。ルッターは、「strengthen」の方を取った。私は「確立させる」と訳したい。「確立させる」というのは、我々の人生観、我々の信仰、我々の望みが確立することであり、確立した時に、力が出てきます。

毎日の人生に真剣にあてはめる

日露戦争の日本海海戦の時、秋山参謀はきんこん緊禪一番、「皇国の興廃、この一戦にあり」といって、戦争に臨んだ。我々も日常生活において、もう少し真剣になる必要があります。福音を、毎日の人生に真剣に当てはめる。これが福音理解の唯一の方法です。真理は考えただけでは分かりません。「毎日の生活にあてはめて、始めて嘘か本当かが分かる」と、内村先生も言われました。

パウロは、(ロマ書1章11節で)その霊の真理、福音を、あなた方に分け与えたいと言いましたが、少し言い過ぎたと考えたのでしょう。ローマの信者は自分の信者ではない。そこで、「いや、そうではない、もっと適切に言うならば、共に励まし合うためにほかならない」と言い改めました。信仰を持っているのは私だけではない、あなたがたも同じ信仰を持っているのだからと。これはパウロの謙遜です。福音の理解については、パウロは第1人者です。福音という言葉は、キリストがお使いになった言葉ですが、その内容を初めて味わったのはパウロです。そのパウロが、信仰において、ローマの信者と同等の地位に立っている。内村先生は、「師たるを知って友たるを知らぬ人間は、伝道者としての資格がない」と言われました。...

1章14節「私には、ギリシア人にも未開の人にも、賢い者にも無知な者にも、果たすべき責任がある」は、福音の適用範囲を述べており、福音はすべての人に当てはまることを意味しています。従って、自分はすべての人に向かって福音を述べ伝える責任があると言っているのです。福音は、我々の知恵を超えている。超えているが故に、すべての人に当てはまる。自分の知恵以上の深い真理を自分のものとするためには、信仰という一手しかありません。

パウロの謙遜

以上、1章8-15節までの私の注解を振り返って、第1に感じますことは、一言で言えば「私はあなた方に会って福音を述べ伝えたい」ということです。...「会いたい」という字が1回、「行きたい」という字が2回、ここにパウロの切々たる情が出ています。福音を述べ伝えたいというのは、霊の賜物を分け与えたいがためです。

第2は、パウロの謙遜です。パウロには教えるだけの十分な資格があります。資格において、パウロの右に出る者はいないでしょう。そのパウロが、「私の信仰ではなく、あなた方の信仰によっても共に励まされるために」といっています。事実、パウロは彼らの信仰によって励まされた。他人の信仰を喜ぶ。伝道者というものは、そういうものです。諸君の小さな信仰がいかにも私を励ましていることか。諸君が私の貧しい福音の伝道を聞いてくれる、この励ましによって、私は24年間、ここで福音を説くことができたのです。謙遜によって、人の偉大さが分かります。人間の人格のバロメーターは、「謙遜」です。

第3に、パウロのローマ訪問の切なる願いは、後日満たされました。しかも、パウロの予想しなかった方法によって、その祈りが聞かれたということです。私は、これには何とも言いようのない深い人生の秘儀があると思います。パウロは、囚人としてローマに護送された。囚人として座敷牢に2年間いた間に伝道し、ついに、ローマで処刑され、殉教した。行きたい、行きたいと願っていたローマで処刑された。その殉教によって、テモテ後書において学んだごとく、全人類に向かって、有力なる伝道を果たした。福音を弁証した。神は、パウロの予想せざる方法、すなわち、殉教において、パウロを通して、福音を全世界に伝道し給うたのであります。

(P.55)

その時の歡喜心、言葉をもって述ぶべからず

3月8日、大西〔延治〕兄弟が亡くなられた日の朝です。私はいつものように、9時頃から30分間、聖書ならびに聖書に類するものを読みました。このとき、『往生要集』も少し読んだ。私は、私のキリスト教を恵心流キリスト教と呼んでいます。パウロを父とし、恵心僧都を母としています。その恵心僧都の言葉の中に、「肉体が死んだとき、救い主が迎えに来る」と書いてあります。これを「来迎」と申しております。また、(横川法語では、)「臨終のときまでは一向に、妄念の凡夫であるぞと心得て念仏すれば、来迎にあずかる。その時の歡喜心、言葉をもって信べからず」と書いてある。すなわち「其時歡喜心不可以言宣」の十文字に接した時、私は全身よろこびに満たされました。我々がこの世の義務を終えて召される時、向こうから来て下さる。我々が行くのではなくして、イエス・キリストが引っ張って下さる。ヨハネ伝14章1-3節を読んでください。「I will come and take you.」と書いてあります。私には、源信が、自分の救い主が来て、源信を迎え給うたとき、言葉をもって述ぶべからずと言った、その喜びが伝わって来ました。源信は、彼の救い主によってこの喜びを得た。いわんや、クリスチャンにとって、その時の喜びは如何ばかりかと、感涙の念を禁じ得なかった。その晩に、大西兄弟永眠の電話を受けました。神が、大西兄弟を連れて行かれた。「兄弟は喜んでおられるだろうな」と、そう思った。ヨハネ伝14, 15, 16章はイエスの遺言の箇所であり、ヨハネ伝のクライマックスとも言える場所です。14章1-3節は、このクライマックスの序言にあたり、そこには遺言の精神が出ています。この箇所を「言葉をもって述ぶべからず、その時の歡喜心を」と注釈する人は、キリスト教の歴史において、恵心僧都の他には少ないでしょう。私はそう確信します。イエス、パウロ、12使徒、いずれも東洋人であった。聖書の深い理解は、東洋人から出ると私は信じます。

(P.59)

福音は神の力

パウロが、〔ロマ書 1 章 16 節で「私は福音を」〕「恥としない」といった理由は、福音が、神の力、我々に救いを得させる力をもっているからであります。死の時に迎えられる喜びがある人には、力が湧いてくる。その喜びがない人には、力がない。誠に「信じる」という、万人に可能なやさしい簡単な条件で救われる。あまりに易しいが故に受け入れ難い、と内村先生は仰せになりました。福音の内容については、後で学びます。私は、易いのに信じる人が少ないのは、我々に、救われたいという欲望がないからだと思う。神の前に義となりたい、救われて天国へ行きたいという欲望がない。欲望がないから信じがたい。問題は、我々の方にあるのです。山海の珍味も、食べたいという欲望がなければ意味がないでしょう。我々が罪人であることを知らされ、救いが必要であることが分かって来ないと、福音は意味がない。ナンセンスです。諸君！自らを反省し給え。

先日の聖日には、当教会の 22 回目の記念日を迎えました。私は、その時、諸君に感謝を申し上げました。皆様がここへ集まって下さるおかげで、面白くない聖書を、やむを得ず 22 年間毎日読まされました。そのお蔭で、少しく聖書の意味を理解することができるようになりました。聖書は、地の書ではない。天の書です。外国語です。人間には分からない書物です。ですから、ヨハネ伝 14 章 1 - 3 節の深い意味が少しも分からない。「人を愛せよ」などというところばかりを読みとっている。そんなことは、キリスト教の奥義から見たら、第 2、第 3 の者です。私は 22 年間、勉強させられたことを諸君に改めて感謝したい。おかげで、永遠の生命が我々のために用意されているという、その真の「よろこび」が、パウロの説いた福音に由来していることを学びました。諸君！これから 2 年間、この福音について、一緒に勉強しようではありませんか。

(P.62)

第8講 問題の提出(2) ロマ書1章16, 17節

私は福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、すべて信じる者に、救いを得させる神の力である。(ロマ書1・16)

救いとは

我々はどうしても、この救いというものがどういうものであるのかについて、知る必要があります。知るだけではいけません。これを自分に当てはめねばなりません。これが難しい。知るだけなら、普通の能力のある人であれば一日で分かる。しかし、これを自分の生活に当てはめて、これが自分の生活に生かされるようになるのには、毎日この真理を思っている、最低10年はかかります。私は、幸か不幸か、君たちのおかげで22年間、毎日聖書を強制的に読まされました。それで、すこしくこの救いの意味が分かるようになった。諸君！この救いを知りたいならば、少なくとも、毎日10年、この真理を心にとめる必要があります。そしたら、この真理は自分のものになる。義務教育でさえ9年かかります。日本民族として最低の知識を得る義務教育でも9年です。いわんや、永遠不滅の真理を自分に体得するのに、そう易々と行くわけがありません。私は少なくとも10年間は毎日この真理を思う必要があると思う。その多少、遅速は問題ではない。毎日やるかやらないかにあります。この真理は、我々にとっては外国語です。ピンときません。我々はこの世のものが欲しい。この世の幸福、この世の名誉が欲しい。永遠の生命はほしくない。しかし、神の救い、ソーテリアというものは、神がキリストにあってわれわれの罪を赦し、神の子となして永遠不滅の生命を与えるということです。...しかし、一度この真理が我々のものとなる時に、キリストが言われるように、「汝らは地の塩、世の光」となり、この世において恐るべきものがなくなる。初めて平安が与えられる。キリスト教の救いというものは、そんなに生易しいものではありません。禪を締め直してかかる必要があります。！(P.69)